保育者養成校におけるアドレナリン自己注射薬(エピペン®)演習の効果と課題

Effects and Problems of Adrenaline Auto-injector Exercises in Nursery Teacher Training Courses

今井　景子[1)]・弓田 安希子[2)]
IMAI, Keiko・YUMITA, Akiko

Key word：Food Allergies, Anaphylaxis, EpiPen®, Role-play

Ⅰ．はじめに

近年、食物アレルギーは増加する傾向にある。平成26年度に行われた東京都の3歳児全都調査では、食物アレルギー罹患状況は16.7%と、平成16年度の同調査における8.5%の2倍近くとなっている[1)]。東京都が平成26年9月にすべての保育施設を対象に行った調査[2)]では、8割の施設に食物アレルギー疾患のある園児・児童が在籍しており、食物アレルギーの罹患状況は在籍児の6.3%である。

エピペン®（以下、エピペン）は、アナフィラキシーショックの症状を和らげるためのアドレナリン製剤を自己注射するための器具で、注射器に薬液があらかじめ充填されたキット製剤である。2011年からは保険適用の処方薬である。食物アレルギーのアナフィラキシー発生時には、迅速、かつ適切な対応が必要となるため、保育所などでは園児・児童の状況によっては保育者や保護者が救急車の到着を待たずにエピペンを使用することが認められている[3)]。

2012年の給食によるアナフィラキシーと思われる死亡事故発生以降、文部科学省は再発防止のための検討を進め、平成27年3月に「学校給食における食物アレルギー対応指針」を定め、緊急時の適切な対応を理解し習熟するために講習会やシミュレーション研修を実践することを推奨している[4)]。しかし、食物アレルギーの講習会の受講率は、保育所、公立幼稚園では高いが、認可外保育施設、私立幼稚園では低くなっている[5)]。本田らの調査では80%以上のものが食物アレルギー講習会に参加を希望していたが、受講率は保育所、幼稚園、認定こども園では57%あまりであり、小規模保育施設などでは38%と低かった[6)]。

本学では2年次生秋学期終了後、2月の保育実習Ⅰ（保育所、施設）をはじめとして3年次生に保育実習ⅡおよびⅢ、4年次生で教育実習を履修する。その前にアレルギーに関する知識は身につけておくべきものであり、できれば、緊急時の対応も理解しておくことが望ましい。そこで、2014年度から食物アレルギーに関する講義の中にエピペンの使い方に関する演習を取り入れてきた。

今回、実際に使う場合の緊急時対応を想定し、エピペン使用のシミュレーションを含む演習を行い、学生の様子および感想を得た。その中から効果と課題について検討し、今後アレルギーおよびアナフィラキシーを学ぶ上での演習の方法について検討したので報告する。

Ⅱ．授業および演習

「子どもの食と栄養（健康と食生活）」、「子どもの食と栄養（発達と食生活）」は、本学こども教育学部幼児教育学科1年次春学期および秋学期に開講する演習科目授業である。それぞれ半期で1単位ずつの保育士免許必修単位の授業で、栄養・食品の知識、食生活、食育などに関する講義を1クラス30人ずつに分けて行う。

この中で「特別な配慮を必要とする子どもの食と栄養」の授業において、「食物アレルギーのある子どもへの対応」として食物アレルギーに関しての講義を行った。あわせてエピペンの演習を行った。本授業の目的は、食物アレルギーについての知識および配慮を知り、アナフィラキシー発生時には緊急時対応をとり必要に応じてエピペンを使うことを理解することである。保育者としてどのような行動をとるか学ぶものであり、緊急時の対応ができるようにすることまでは求めていない。

演習を行う学生の様子と授業終了後に記入したリアク

1）こども教育宝仙大学　専任講師
2）こども教育宝仙大学　看護師

ションペーパーの内容から演習に対する学生の反応を報告する。

1. 実施日および受講者

2017年9月29日および10月2日（両日共に同じ内容）

講義受講者は、全学生90名のうち欠席者11名を除く79名である。

2. 講義内容

講義は以下の内容について教科書およびプリントによる資料を用いて行った。

・アレルギーとは
・食物アレルギーの原因となる食物
・アレルギーの症状、アナフィラキシーショック
・食物アレルギーの対策
・食物・食材を扱う活動に関する注意[7]

時間配分は、以下の通りである。

内容および時間配分

時間配分（全体80分）
1. 講義：食物アレルギーとは、保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（20分）
2. 動画視聴：「エピペンの使い方」(5分)
3. 演習：エピペン自己注射（5分）
4. 動画視聴：「エピペンストーリーのみ保育園」(10分)
5. 演習：ロールプレイの役割分担、せりふの相談（5分）
6. 演習：ロールプレイ実施（30分）
7. 振り返り（5分）

3. 演習内容

演習は、動画視聴およびファイザー株式会社より貸与を受けたエピペン練習用トレーナーを用いて行った。使用したエピペン練習用トレーナーは、針がなく薬液が入っていない、使い方の練習専用のものである（写真1）。

・動画視聴：「エピペンの使いかた」[8]
基本的な扱い方および取扱いに関する注意、自己注射の方法、注射すべき場所などの解説を行った。
・エピペン演習：1人が1本ずつ使用してエピペンの使用法の確認と自己注射の練習を行った。
・動画視聴：「エピペンストーリーのみ保育園」[9]
保育園でアナフィラキシーを起こした子どもへの対応を学んだ。
・アナフィラキシー対応の解説

「食物アレルギー緊急時対応マニュアル（2017年3月版）」[10]に従い、アレルギー症状かもしれないと考えられる子どもを発見した場合の行動内容を解説した。対応の流れが一覧できるので、香川県小児科医会作成の食物アレルギー緊急時対応マニュアル[11]（以下、マニュアル）を使用した。緊急時の役割分担を下記枠内に示す。

緊急時の役割分担

○観察係（発見者）
症状の観察と緊急性の判断、子どもに声をかけ続ける、症状チェックシートに従い処置の必要性を判断する、経口薬を内服させる、エピペンを使用／介助する、心肺蘇生、AEDの使用／介助
○リーダー
現場到着後リーダーとなる、すべてを把握する、緊急時対応マニュアルに従い判断、指示・内服の指示／介助、エピペンを使用／介助する、心肺蘇生・AEDの使用／介助、保護者への状況説明
○連絡係
校長・園長および施設長を現場に呼ぶ、準備係へ連絡、救急車を要請（119番通報）の後に誘導係に連絡、記録係やその他の人を集める、保護者に連絡
○準備係（現場へ必要なものを運ぶ）
エピペン、内服薬、AED、食物アレルギー緊急時対応マニュアル、症状チェックシート、個別対応シート
○記録係
症状の観察、症状チェックシート、エピペンを使用した時刻を記録、内服薬を飲んだ時刻を記録、5分ごとに症状を記録
○誘導係・その他教職員
他の子どもへの対応、救急車の誘導

・演習（ロールプレイ）

ロールプレイ（役割演技法　以下、R.P.とする）とは、ある事柄が現実に起こる場面を想定して参加者が即興劇を演じ、役を演じる疑似体験を通してその事柄が実際に起こったときに対応できるようにする学習方法の一つである。

今回のロールプレイの場面設定、登場人物および役割を下記枠内に示す。異変がある子どもの発見、応援要請、緊急性の判断、エピペンの使用、救急搬送までを一連の流れで行った。エピペン使用のシミュレーションを中心とするため、経口薬の服用、心肺蘇生・AEDの使用／介助、ほかの子どもへの対応はロールプレイから除外した。

学生が行った内容は、①配役を決める、②役割分担を決める、③動画[9]を参考にして役割に応じて演ずる内容およびせりふを決める、④実際に演ずることである。

園児のアナフィラキシーの症状は、マニュアル中で緊急性の高い症状とされているものから選択した。保育園で少人数での対応を想定して登場人物は4人としたので、マニュアルに記載されている役割を学生が職員A、B、

Cに割り振った。

ロールプレイの場面設定

○登場人物および役割　（4名1グループ）
・園児：食物アレルギーでアナフィラキシーを起こしたと考えられる子ども
・職員A（保育者）：発見者
・職員B
・職員C（園長）
○場面設定
小麦アレルギーの既往のある5歳児が保育園で除去食の給食を食べた。30分後に教室で遊んでいる途中から皮膚が赤くなり、じんましん、腹痛、せきなどの症状が出現した。
エピペンおよびマニュアルなどは所定の場所に配置されていて、所在は周知されている。

Ⅲ．演習の様子および学生の反応

1．エピペンの自己注射

使用法についての動画を見ていたため、握り方などについてはよく理解されていた。大部分の学生は、動画での説明通りあらかじめ注射部位にあてておいて押しつけるように注射していた（写真2）。調子に乗って振り下ろして打つような動作をする学生がいたが、その都度注意して正しい打ち方を確認させた。

2．R.P.によるシミュレーション

役割やせりふ、行動について打合せした後に、1グループずつR.P.を発表した。発表者以外は、演じられているものを見て知識の共有を図った。足りない部分は、講師が補足しながら行った。

学生は、グループにより子どもの症状を「ぐったりしている」、「呼吸困難が強くて横になれない場合」（写真3）、「吐き気・おう吐がある場合」（写真4）などと想定した。それに応じて、安静を保つ体位およびショック体位[11]にしていた。主に全身症状としてぐったりしている子どもを演ずるものが大半であったが、激しい腹痛、嘔吐を繰り返す、持続する強いせき込みを演じる者もあった。あわせてじんましんを想定して体をかきむしる動作を行っているものもいた。

発見者役は、異変のある子どもを発見し駆け寄り声かけをしていたが「どうしたの」と聞いている者が多く、それに対して子ども役が「お腹が痛いの」などと答えていた。緊急時の対応を理解して、大声を出してその場に協力者を集めることをできるものとできないものがいた。できなかったものは、声を出すのが恥ずかしいのか、何と声を出したら良いのかわからない様子であった。

食物アレルギーによるアナフィラキシーショックが疑われた際には、食物アレルギー緊急時対応マニュアルに従って行動する。子どもの症状として緊急性の高い症状か否かを判断するチェックの際に、マニュアルに記載された症状を一つ一つ見比べて読み上げている者がいた。緊急時は素早い対応のために急ぐこともあるが、演習としてはマニュアルを確認して発症児の状況を周りの皆で確認することは重要なことである。

準備係の役割は、呼びかけに応じて現場に行き、内服薬やエピペンの必要性があれば取りに行くことである。エピペンの置き場所を前もって定めておいたので、迷わずに取りに行くことができた。

連絡係の役割は、救急車の要請および保護者への連絡である。アナフィラキシーという言葉がとっさに出ず、「アレルギー、アレルギー」とだけ繰り返す姿が見られた。

記録係役の学生は、実際に症状や時刻を用紙に記入はしていなかったが、救急隊が到着すると時計を見ながら「○時○分ごろ子どもに異常があることを発見しました。症状は××で、エピペンを使用しました。現在は、□□な状態です」と伝えることができたものもいた。

園長は職員Cを兼ねていたため、リーダー役としての判断や指示にはならなかったが、単独で行動せず複数で判断することが理解されていた。

エピペンの使用はマニュアルではリーダーまたは発見者が行うが、R.P.ではできるものが行っている状況であった。しかし、単独では行わず子どもの体をおさえて介助する、子どもに声をかける、など協力し合いながら行っていた。

以上の対応を行い、救急隊員が到着したら症状および記録を報告し、搬送してもらいR.P.を終了した。

「あなたたちは園の責任者になり、判断する立場になる可能性があるから演習する」と前置きをすると、照れがあってR.P.に積極的に取り組めなかった学生も、子どもの命を守る立場であるという自覚が現れ、積極的に授業に参加する姿勢が見られた。

Ⅳ．リアクションペーパーに記載された学生の気づき

授業出席者79名のうちリアクションペーパーを提出したものは60名（男性4名、女性56名）であった。

リアクションペーパーで尋ねた内容は、自分または周囲の人の食物アレルギーの状況、エピペントレーナーの講習について、感想：自由記入（食物アレルギーについて、エピペンを打たれる子どもについて、エピペンを打つことについて、その他）である。

1. 食物アレルギーについて

1–1　自分または周囲の人の食物アレルギーの状況

学生の食物アレルギー有病状況と周囲の人の食物アレルギー有病状況を尋ねた結果を表1に示す。

食物アレルギー有病率は15%であった。現在の成人の有病率は不明であるが、乳児の5～10%、学童の1～2%の有病率[12]と比較すると非常に高い。しかし、症状が重篤なものはおらずエピペンを処方されているものはいなかった。授業や日常生活においては、食物の選択は自分で行い特段の配慮は必要としていない。1名は子どものころエピペンを処方されていた。

周りにアレルギー有病者はいるかを尋ねたところ、30%のものがいると答えた。

うち、1名は家族に重篤な食物アレルギー症状がでるものがあり、エピペンを所有しているとのことである。「周りにいる人」ということで家族には限定しなかったが、学生は周りにいるアレルギー有病者の存在を意識していることがわかった。周りに有病者がいることにより、アレルギー児は特別な存在ではないと認識されていた。

1-2 「食物アレルギーについて」の記述

・食物アレルギーには注意しなければならない（19名）
・アレルギーがある人はかわいそう、つらいだろう、大変だろう（14名）
・アレルギーに関する知識を持たなければならない（13名）
・食物アレルギーは怖い（11名）
・食物を確認することが必要だ（7名）
・「食物アレルギーは命にかかわることもあるので、正しい知識が必要だと思った。将来保育職についたら子どものアレルギーにはしっかり注意しなければならない」（アレルギーの有無：アレルギー無、R.P.時の役割：子ども）
・「食物アレルギーをもってしまうことは仕方のないことだと思う。保育者は知識を持ち、アレルギー児と信頼関係を築かなければならない」（アレルギー無、職員B）

講義では、食物アレルギーの表示義務がある食品を示し、有効な対策は除去食であること、保育の場において注意しなければならない事例[13]を示した。学生の記述には、保育の場におけるアレルギー児の対応について「注意が必要」「知識を持たなければならない」「食品の確認が必要」という心構えを持ったことと「かわいそう」「怖い」という心情を示す記述があった。

2. エピペントレーナーを使った感想

2-1 「エピペンを打たれる子どもについて」の記述

・怖いと感じるだろう（24名）
・保育者の声かけや気持ちのケアが必要（17名）
・痛そうである（9名）
・「エピペンを打つ前の子どもは苦しんでおり、怖がったりすると思うので、保育者が落ち着いて子どもに声をかけながら緊急時の対応をすることが大切な役割だと感じた」（アレルギー無、職員A）

子どもの心情を察して同情的な記述がある一方、保育者としての役割を認識する感想もあった。

2-2 「エピペンを打つことについて」の記述

・怖い、不安だ（18名）
・命にかかわる（14名）
・冷静に、落ち着いて、慎重に（13名）
・知識が必要（7名）
・迅速な対応が必要（6名）
・簡単（5名）
・難しい（4名）
・「（エピペンを打たれることは）痛いと思うが、アナフィラキシーショック発症時の呼吸困難よりは楽なものだと思うので、受け入れて欲しいと思う」（アレルギー有、過去にエピペン所有、発見者）
・「エピペン注射はかなり怖いし、痛みを与える行為であるが、われわれがやらないと命を落とす場合もあるの

表1　食物アレルギーの有病状況

人　カッコ内は%

	無し	有病	
自分は食物アレルギーか（n = 60）	51 (85.0)	9 (15.0)	
	有病者無し	有病者あり	無回答
周りに食物アレルギー有病者はいるか（n = 60）	41 (68.3)	18 (30.0)	1 (1.7)
	持っていない	持っている	無回答
上記有病者はエピペンを持っているか（n = 18）	15 (83.3)	2 (11.1)	1 (5.6)

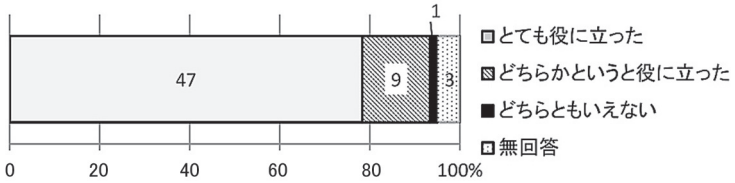

図１　エピペン演習は役に立ったか　n=60

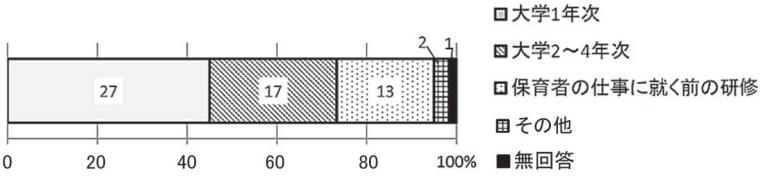

図２　エピペン演習はいつ行うのが望ましいか n=60

で、責任をもって行うべきだと思う」（アレルギー無、発見者）

・「早いうちからエピペンの使用法を知る事でいざというときに使用できる。実習の時にアレルギー児を注意してみることができる」（アレルギー無、職員A）

・「保育者というものは、子どもや保護者の気持ちや状況を理解するだけではなく、子どもに異変が起こったりしたときの知識を頭にいれておかなくてはならないものだと感じた」（アレルギー無・職員A）

「エピペンは怖い」という記述が多くみられた。一方、「命にかかわる」、「冷静に、落ち着いて、慎重に」、「迅速な対応が必要」は、自分が行わなければならないことを前提に「なぜ使わなければならないのか」、「どのように使わなければならないのか」を考えた記述であった。また、「知識が必要」と自分の持つ知識と照らし合わせて足りないことを確認した学生もいた。

2-3　演習を行った感想

・エピペンの演習は良い経験であった（27名）

・エピペンを使えるようになるのは必要なことだと思う（12名）

・自分はエピペン注射ができるかわからない・不安である（10名）

・エピペン演習はつらかった・怖かった（5名）

・真剣に取り組むべきであった（4名）

・エピペンが不必要になるようにアレルギーに注意したい（3名）

・再度講習を受けたい（3名）

・「きちんとした知識がなければできないことなので、しっかり覚えたいと思う。実際の場合にはあわてずに使えるようになりたいと思った」（アレルギー無、職員A）

・「実際に子どもが苦しんでいる中、エピペンの針をさすのは正直怖い。大きな音と、自分が子どもに針を刺す緊張感を実際に体感するとすごくドキドキした」（アレルギー有、職員B）

・「扱い方や注意することは事前に学んでいたが、実際にグループで行ってみると、エピペンの使用に少しとまどったりして、落ち着いて行うのは難しかった。注射するのは勇気がいるけれど、対処は早くできるので命を救うことが出来る可能性が高まる。正しい使用方法を知る事が出来て良かった」（アレルギー無、職員A）

3. エピペン演習実施について

演習を行って役に立ったか、およびエピペン演習をいつ行うのが望ましいと考えているか、を5段階尺度で尋ねた結果を図1、図2に示した。

93％の学生が役に立ったと答えた。演習を行うのは、現行の大学1年次で良いと考えている者が45％、高学年になってからの方が良いと考えるものが28％であった。また、保育職につく前の研修で行うのが良いと考えている者が22％で、仕事に就いて子どもに関わる前に受けるのが望ましいと考えている者が大部分を占めた。その他は「定期的に行う」「1年に1度」という希望であり、卒業までの間に複数回行いたいというものであった。

Ⅴ．考察

医療行為であるエピペンの注射練習は学生に有意義な演習だという感想を持たせた反面、怖い、かわいそうという気持ちを抱かせることもあった。針が出てくることが怖い、自分が打つことに責任を感じて怖い、など恐れる要素は多数ある。エピペンは使用しても悪影響はないので、必要だと判断したらためらわずに使ってよいことを伝えた。演習を行い知識と使い方を学ぶメリットはあっ

たが、早いうちにエピペン注射を学ぶことにより恐怖心を持たせてしまったという懸念が生じた。

針や薬液のない練習用トレーナーであっても自己注射（練習）するだけでもとても怖く、ましてや他人に注射することなど考えられないという学生もいたので、マイナスイメージだけを残す演習にしないことを考える必要がある。

R.P.で必要な言葉を自分で考えることで行動や発言など自発的に考えることを促したが、子どもに接する経験が少ない1年次生のため難しいようであった。発見者役の学生は、ぐったりしている子どもに対して何と尋ねれば良いか迷っている様子であった。子どもに対しては、「どこが悪いのか」と開いた質問ではなく、うなずいてもらうだけで答えがわかる「お腹が痛いのか」「気持ちが悪いのか」「息が苦しいのか」と症状の確認をする閉じた質問のせりふの用意があればよかったと考える。また、気恥ずかしさが先に立ち真剣に演習ができないのなら、せりふを作ってシナリオ通りに読むシナリオドラマの形式が良いのではないかと考えられた。子どもの観察と不安を除くような声かけをすることを中心とした内容のシナリオを用意すれば、使命感が先に立ち、不安感や緊張感を緩和してエピペン使用に関して前向きに学べるのではないかと考えられる。

巻末に参考として保育者養成校学生向けシナリおよび作成の目的を記す。次回演習を行う際にはこのシナリオを用いてドラマ形式で行い、学生の意識を調査することで、学生が前向きに取り組んでいける方法を考えてゆきたい。

阿久澤は「実際に子どもを預かる保育所看護職者がアナフィラキシーショック発症時の対応に対して『職員全体が緊急時に適切に対応できるか否かわからない』と認識していた」と報告している。保育者の対応で困難だと認識している内容は、「保育士が子どもの症状の変化に気づけるか難しい」「アドレナリン自己注射薬を打つタイミングが判断できない」「保育士が必要時アドレナリン自己注射薬を使用することに対して抵抗がある」としている[14]。

保育者の対応にこのような困難があると考えられるのは、緊急時を想定した活動に慣れていないことや医療行為であるエピペンの針を刺すということに対する恐怖心が原因と考えられる。エピペンの使用事例を数多く知る事は、恐怖心を和らげ、使用判断の助けとなるため、広く公開されることを望む。

保育者養成の早い時期に、緊急時には自ら行動しなければならないということに気づき、何をどう行うべきかについては1度では身につかないことを知り、知識も深めていこうという意欲をもたせた本講習は有意義であったと考えられる。就職先がどのような形態の園でも研修を重ねて安全に配慮した活動を行う力をつけて欲しいと考える。

Ⅵ　結語

食物アレルギーのアナフィラキシーに対するエピペン使用のシミュレーションを取り入れた演習を行った。演習時の学生の様子とコメントペーパーにより演習の効果を調査した。学生には不安感や恐怖心を抱く者も多かったが、食物アレルギーは命にかかわることがあることを知り、エピペン使用の重要性を認識したのは演習の効果であった。緊急時のエピペン使用について自分たちでせりふを考えてロールプレイすることは難しく、発言する言葉が決まったシナリオドラマの方が良いと考えられた。今後は、エピペン演習にシナリオを取り入れることで、学生に負担なく、かつ効果的に食物アレルギーの緊急時対応を学ばせ、保育の場で必要時に判断や実施ができるような保育者を育てていきたい。

引用・参考文献

1) 東京都健康安全研究センター：アレルギー疾患に関する3歳児全都調査（平成26年度）報告書
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/allergy/pdf/res_a06.pdf（2017年9月23日アクセス）
2) 東京都健康安全研究センター：アレルギー疾患に関する施設調査（平成26年度）報告書
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/allergy/pdf/res_b04.pdf（2017年9月23日アクセス）
3) 文部科学省：今後の学校給食における食物アレルギー対応について（通知）医師法第17条の解釈について、平成25年11月27日
4) 文部科学省：学校給食における食物アレルギー対応指針
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1355518_1.pdf（2017年9月23日アクセス）
5) 中部管区行政評価局：乳幼児の食物アレルギー対策に関する実態調査結果
http://www.soumu.go.jp/main_content/000339703.pdf（2017年9月23日アクセス）
6) 本田まり、西川貴子、佐伯志保里：小規模保育や家庭的保育における食物アレルギー対応および食物アレルギー講習会に関する実態調査、神戸女子短期大学論攷、62巻、27－35頁（2017）
7) 厚生労働省：保育所におけるアレルギー対応ガイドライン
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku03.pdf　47頁（2017年9月23日アクセス）

8) ファイザー株式会社：エピペンの使い方
https://www.youtube.com/watch?v=Nl0N0cM7StU
（2017年9月23日アクセス）
9) 香川県小児科医会食物アレルギー対策委員会：エピペンストーリーのみ保育園
https://www.youtube.com/watch?v=pIiix6ExejM
（2017年9月23日アクセス）
10) 東京都福祉保健局：東京都アレルギー情報navi. 緊急時対応マニュアル
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/allergy/measure/emergency.html（2017年9月23日アクセス）
11) 香川県小児科医会：アレルギー緊急時対応マニュアル改訂版
http://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkyoui/hotai/pdf/health/H29allergy-manual.pdf（2017年9月23日アクセス）
12) 海老澤元宏／伊藤浩明／藤澤隆夫監修：食物アレルギー診療ガイドライン2016（日本小児アレルギー学会）、(2016)
13) 峯木真知子、高橋淳子編：子どもの食と栄養、（みらい）、151-156頁（2015）
14) 阿久澤智恵子、青柳千春、金泉志保美　他：保育所（園）における食物アレルギー由来のアナフィラキシーショック治療のためのアドレナリン自己注射薬を持参する子どもの受け入れ状態に関する実態調査、小児保健研究、75（1）、20-28頁(2016)

写真１

写真２

写真３

写真４

参考　アナフィラキシー発症時のエピペン注射　ロールプレイングのシナリオ　（保育者養成校版）

○登場人物および役割
　幼児（あっちゃん）：食物アレルギーでアナフィラキシーを起こしたと考えられる５歳児
　Ａ先生（保育者）：発見者、症状の観察と緊急性の判断、発症幼児への声がけ、応援要請、エピペン使用・介助、記録
　Ｂ先生（保育者）：エピペン・ＡＥＤ等の準備、救急車の要請・誘導、保護者への連絡
　園長　　：リーダー、緊急時対応マニュアルに従い判断・職員への指示、エピペン使用・介助
○場面設定
　小麦アレルギーの既往のある５歳児が、保育園で除去食の給食を食べた。30分後に教室で遊んでいるうちに皮膚が赤くなり、じんましん、せき、腹痛などの症状が出現した。

幼児：コホンコホン（咳）　※腕を掻きながら咳をしている
Ａ先生：あっちゃん、大丈夫？ かゆいの？
幼：うん。かゆい。コホンコホン。
Ａ：咳もしているね・・苦しい？
幼：大丈夫・・・（大丈夫と言っているが、苦しそうな様子）
Ａ：あっちゃん、アレルギーだったわね・・給食の後だし、もしかして、アナフィラキシー？？
　　エピペンも預かっていたわ・・・。
　　Ｂ先生、あっちゃんが、アナフィラキシーかもしれないので、今すぐ、エピペンセットを持ってきてください。園長先生も呼んでください。
Ｂ先生：はい。Ａ先生、症状や時間の記録をお願いします。（エピペンや、緊急時マニュアルなどを取りに向かう）

幼：先生、おなか痛い・・（おなかの痛みがどんどん強くなる）。
Ａ：どの辺が痛い？ ここ？（おなかをさすりながら）
　　吐きそう？ 大丈夫？
幼：大丈夫・・。おなか、いたい・・。
Ａ：あっちゃん、横になろうか。大丈夫？
幼：うん。いたい・・、いたいよー。

（園長、Ｂ先生が戻ってくる）

園長：あっちゃんは、どんな様子ですか。
Ａ：蕁麻疹と咳が出ています。ゼーゼーはしていないです。先程から、おなかの痛みも出てきました。

園：そう・・・、明らかに症状が進んでいるから、救急車を呼びましょう。
　　Ｂ先生、救急車への連絡と、あっちゃんのおうちへの連絡をお願いします。

Ｂ：はい。
　　（救急車要請の電話と、家庭へ電話をして、状況を説明する。必要に応じてエピペン使用の許可を取る）

園：Ａ先生、エピペンセットは準備できている？
Ａ：はい、ここです。園長、念のために、一緒にマニュアルを確認しましょう。
　　（以後、マニュアルを確認しながら進める）
幼：先生、おなか痛い、いたい・・・。苦しいよ・・・。
園：おなかの痛みもどんどん強くなってきている・・・。症状チェックシートでは、直ちにエピペン使用となっているね。救急車はまだだけど、待つ間にひどくなってしまうから、エピペンを使いましょう！
Ａ：はい！ あっちゃん、これから、エピペンを使うね。
幼：先生・・・注射、こわいよ・・。
Ａ：あっちゃん、大丈夫。先生もついているからね。頑張ろう。
幼：うん・・。
Ａ：あっちゃん、ゆっくり上を向いて、ゴロンしようか。
幼：うん・・・。

【エピペンを打ちやすい体勢をとる】
　□ゆっくり仰向けにする
　□エピペン使用者（ここでは園長）は、子どもの脇に座る
　□介助者（ここではＡ先生）は、子どもを挟んで使用者と向かい合わせになる
　□介助者は、子どもの足のつけねと膝を押さえる
　※もう１人介助者がいれば（ここではＢ先生）上半身を押さえる

園：では、私が打ちます。右足に打ちます。
Ａ：あっちゃん、ちょっと痛いかもしれないけど、すぐ終わるから、じっとしていてね。
　　大丈夫だよ、おなか痛いのも、楽になるからね。
幼：うん・・・。

【エピペンをケースから取り出して、利き手で「グー握り」をする】
　□オレンジ色を下にして握る
　□親指は添えない
　□握ったら持ちかえない

【エピペンを打つ位置を確認】介助者が押さえている太ももの前面、中央、外側に打つ
□ 服の上からでも良い
□ ポケットの中が空であることを確認

【エピペンを打つ】
□安全キャップ（青色）を上に引き抜く
□先端（オレンジ色）を目標に軽くあてる

園：エピペンするよ！ じっとしていてね。

□そのまま垂直にグッと押し付ける
□「パンッ！」と音がしたら、投与完了。そのまま3秒待つ
※音がしない場合はもう1度グッと押しつける

園：1・2・3・・・。
終わったわよ。打った所、マッサージするね。

□エピペンを太ももからゆっくり離し、注射部位を軽くもむ
□オレンジ色のニードルカバーが伸びていることを確認する

園：エピペンのカバーも伸びているから、大丈夫ね。
A：あっちゃん、よくがんばったね。救急車がくるまで、このまま横になっていようね。
幼：うん・・・。

B：救急車が到着しました。（救急車到着）

園：アナフィラキシー症状がみられたので、12時40分にエピペンを打ちました。
A：経過は症状チェックシートに全部書いてあります。使用済みのエピペンはこれです。

※アレルギー緊急時対応マニュアルは各園で作成してある。
※アレルギー児に対しては、個別に緊急時個別対応票が作成してある。

保育者養成校学生用のシナリオの作成

香川県小児科医師会食物アレルギー対策委員会作成の、動画「エピペンストーリーのみ保育園」を参考にシナリオを作成した。シナリオの流れは以下である。

1. 幼児の体調の変化に気づく
   発見者が症状確認
2. かゆみ出現
   児への声かけ、アレルギー既往の確認、人を集める、記録の開始
3. 症状の悪化
   緊急マニュアルとエピペンの準備、リーダーを呼ぶ、リーダー到着、症状の確認
   救急車の要請、保護者への連絡、エピペン使用の許可、緊急時対応マニュアル・症状チェックシートの確認
4. エピペン注射
   児への声かけ、エピペン注射、ショック体位の保持
5. 救急車到着
   症状の説明

保育者養成校学生用シナリオ作成のねらい

本シナリオの目的は、保育者としてアナフィラキシー発生時には緊急時対応をとり、必要に応じてエピペンを使うことを理解することである。緊急時対応が熟練することまでは求めない。

アレルギー症状の理解、子どもへの声かけ、エピペン使用の練習ができるようになることをねらいとした。

シナリオは、4人の学生でロールプレイする内容とし、全員がエピペン使用または介助に参加することで、保育者としてこのような場面に立ち会う可能性もあるという心構えをもたせ、職員や係りの役割をイメージできるようにした。

学生は子どもの症状の判断が付きにくく、声かけも「大丈夫か」「どうしたのか」という子どもにとって返答が難しい質問になる傾向があった。そのため、どのような問いかけをすれば、子どもが答えやすく、症状を明らかにできるかを考えられるようにした。また、保育者として安心させる・励ますなどの子どもによりそう声かけを行えるようにした。

アレルギー症状の発生からエピペンの使用まで一連の流れをシナリオに組み込み、練習も兼ねられるようにした。本シナリオでは、会話の内容だけではなく、エピペンの確認事項や使用法を一覧できるようにした。

アレルギー症状の理解を深めるために、かゆみ・蕁麻疹、咳、腹痛、激しい腹痛、症状が複合していく様子を示した。